

鍋島誠大人著

冥洲美石鏡

瑞穗乃舍藏



238068



真洲美乃鏡序



高天原尔神留座高産靈御祖

乃神乃靈伎造化尔神定定賜

閑流言靈乃御幸波余天地耳

通理是飛穴尔靈妙奈留物尔

奈毋安留故古後言靈乃輔留

真洲美乃鏡序 一 出前惠乃言成



國言靈乃幸波布國登祢申之
 壽申之天現敷青人草乃奇之
 伎寶登叙貴備祢留然留素干
 葉破如何神乃御心奈里祢
 武中都御代乃末良從唐乃佛
 乃曲轉耳移以天古乃大幾御

傳波之毛有可無可尔久陀知
 行素此項乃大人等伊都等米
 耳都等米天道乃志母等素刈
 都礼抒徒耳五十連乃音等加
 云他國乃言舉素吾物等取用
 天此大皇國乃雅言乃可美言

素解得満久欲寸留米礼婆言
 語乃分別聲乃祈治米波刈菰
 乃亂礼尔亂礼麻絲乃母都礼
 尔母都礼小篠下草生蔓理天
 神随直在道素踏多賀比横様
 乃道乃刈婆祢爾足痛渡素見

乃宇礼多久間之悲之久牙嚙
 憤理天叫啼泣歎祈禱甕槌乃
 神也於波佐奴經津主乃神夜
 母座奴等天津水仰天待耳川
 舟乃毛ニ叙ニ呂ニ耳神乃御
 心寛在婆曲津日乃曲乃荒備

真洲美加鏡 上の巻 三 瑞穂乃舎藏

尔古乃正言乃神言波霜都豆
 羅閉二那二良二耳浦夫礼奈武
 素妙奈里也直日神久之備奈
 里也思兼神直日乃靈思金乃
 靈賜里天天霧合八重棚雲素
 稜威乃道别搔别天朝日如言

靈乃御光素仰見与以多陀幾
 見与登稜威乃男建備踏建備
 燒鎌乃利鎌持天蔓在小篠下
 草刈拂比道乃正所遠探知天
 吾皇神乃命冠夫里今之磨尔
 磨出多留此真洲鏡叙余是素

真洲鏡山の巻 序 四 瑞穂乃鏡

以モ天テ照テ佐サ婆バ皇スメラミコ國ニ乃ノ道ミチ乃ノ八ヤ十ソ
 隈クマ落オチ受ズ繁シゲ利リ尔ニ繁シゲ礼レ留ル千チ万ヨロヅ乃ノ
 言コト乃ノ葉ハ素フ一ヒト都ツ心ココロ耳ニ見ミ晴ハル加カ之シ
 奈ナ武ム物モノ敎ゾ等ト言コト靈タマ乃ノ舍ヤノ主アルジ誠マコト麻マ
 都ツ夫ブ左サ尔ニ言イフ

正五位巖谷修書



凡例

一我國乃先哲等梵國悉曇は説よ出て多る五十音の圖を誤て我國の音韻乃律調と倣して取用し来り即ち此圖を用て言語仕格を定免而して古典古史を釋し和歌和文裁製乃模範不供せり故尔古言は誤釋文法乃誤格甚と多きを觀るふ至り我師鍋島誠大人夙尔之を憂るこや久し今當さふ其謬弊を矯正せむやし乃ち此書を編纂せられし所以あり

一此序文は訓法明のちらさる所ありや雖著者鍋島大人既尔故人やなり多れも其訓法を問ふ由なきを以て今般大教正本居豐頼大人不問定免て假名を付

一多

一此書刻成乃上著者の校閲を經る不由なりや雖毫も原稿不違はざるに深く注意を加へ多

一我國文範言辭學此書既も上梓に係り世も公行せし者汗牛充棟啻ならずもや雖多くハ完全なる者非徒徒小梓楮を費やしのみ獨此書ハ秩序整然として素よ且無瑕不成る是故不讀者或も他の冗籍や同視せざる勿き言靈乃蘊奧文法の定格等至正此理を極るり豈何と纔も初學ハ一助も供する淺近乃者ならむ哉

一此書ハ先哲の訛説を改良し我國の純然なる韻調文格等を識らしむる奇鑑や知る可し抑古典古史を學ひ和歌を詠し將も我國の言語ハ靈妙あるを知らむや欲せハ必此書不從らされを宇内其代用不足る可き珍書あらざるなり

一鍋島大人獨り皇學の精微を極るけみならず又内外各國の學術を修るり天稟敏達なりて能く師友も就て學をす駸々乎やして獨習自然も成る所謂天縱ハ才なる者あり故も大人到る處和漢梵學及洋學和洋數學其他數種ハ學術を大人も就いて修學せし者枚舉も可らざる然れども大人猶も夙も皇産靈神の神定を定め賜へる言靈眞洲鏡ハ世も傳存せざる哉悟り得るりし賀若年ハ時千歳の舊家ある紳士ハ所藏も

係る言靈眞洲鏡を題せし二片の音鏡を賜はりた
り乃ち其二鏡を朝昏熟考琢磨して終ふ其定義を下
せり漸く成年に到り去る文久年間始て此書を著す
即ち此に從て今人始て言靈の原則を知るを得可
く而して地球中最も言語の正しきハ獨我國のみ他
國乃言語ハ當さる鳥獸乃轉叫に似て殊に文格も正
確ありざるを知る可し然則ち此書ハ實に皇國の奇
寶と謂つ可きなり

一余輩今其遺稿を以て出版せし公行するに主意たり
や翅小著者の宿志を満足せしむるを欲するにのみ
非ず博く普天乃下率土に濱の黎民諸彦をして我國
乃眞正ある言靈の原則を識らしむるを以て我國文學
完備に模範ありしむる事を期せばた造化乃三神座
に座を設け云はる古傳説を疑ふ人をして其眩惑の凝
結を一朝に氷解せしむるを目的とする者あり

鍋島誠門人

紀元二千五百四拾六年晚冬十二月 鈴木昌玄誌

産靈神萬有を創

て制しはしくあ

る夏

歴朝此史典より其

證明かあり

萬有は三つに區

別する理ハ次に

詳解すへ

古事記の序にも

乾坤初分參神作

造化之首と書れ

あり

支那国は陰陽五

行ハ更にもいハ

む佛国は四大は

説どもを取らま

ふらむ必かくも

るべからむ去れ

等此論説されま

著ハせる国は御

柱もよく詳あ

眞洲美乃鏡上卷

鍋島

誠著

産靈の神はみまはふよきて此世間に

あり出るる物品ら限りもなき多

れどこれを括れば三ツはこあ

其一には 土金石油水 等此類也

其二には 草木 等此類也

其三には 人鳥獸虫 等此類也

此三種れ中みはぐめれ一種ハ生死

れあれた物品之後は二種ハ生死れあ

る物品之此生死のある物品れ中に

眞洲美乃鏡

上卷

鍋島誠著

地球論ハ地學
 新論と名附て著
 あり
 まあ三大考玉此
 真柱あどりの書
 もあり
 近世西洋學とい
 ふもの行あちれ
 てそれが書籍ど
 もに地球中の萬
 國を五にらうち
 五大洲といふよ
 一みえありきて
 それハあトやよ
 うろつバあふり
 う。あめりう。あふ
 すあり。此五あ
 然れども必五
 ありむともあり
 ぬべくことよ
 皇朝ハ御さあめ
 ばあらねバ其稱

も末此一種ハ意識といふも此あり
 其中にも人ハことよ尊たこと萬物
 よすぐれあはさして此世間に人此を
 む圀ハ地球の三分一にて三分二ハ
 大洋ありとぞ其三分一ハ圀も一隅
 にかよよれるふハあらむして八十
 圀八十嶋と分れあは此八十圀八十
 嶼のあるが中にもあつた何里さむ
 た何里て所所あふがふめれと我
 葦原ハ瑞穂の圀ハ地球の首に位
 てことにめであた圀あははあ此八

名をとるべから
 ず
 皇國ハ 帝城ハ
 北極の出度三十
 五度にして風土
 此よりき度萬
 國ハ勝れらるよ
 外夷ハ著した
 る。べんげらひ
 ん。どもんやつむ
 ん。といふ書も
 記したり亦
 皇國人の著せる
 にも日本水土考
 といふ書にもよ
 く論り
 天皇ハ天津日嗣
 連綿するハ偶然
 あり
 天照大御神ハ神
 勅ハ實證書紀の
 中にあり地球中

十圀八十嶼よをみとをむ蒼生の何
 るがあかよもさかした何里お海か
 ある何りて質々にかもるあれど我
 大皇圀ハ大御多からハ神の遠孫に
 てあよとにあふとた人あはされ
 そ天地開闢ハ時よりして今ハ現在
 世にいあるはで
 天照大御神の御附屬ハはあ
 天皇の天つひつぎ連綿に宇内を
 しめあははけは志ああるはこにあ
 らむ蒼生の一日一夜もあくてえ何

皇沙美ノ金 一の巻

二 上巻 皇沙美ノ金

八十国八十島あり
 此ど歴代同系に
 て治まれるハ一
 国も一島もある
 ことあり豈あや
 うらむや
 熱地ハ多く草根
 を食ふ寒地ハ常
 ニ肉食すまるち
 へをといふ夷島
 ハ椰子といふ樹
 の水液を以て食
 を煮るよ一獨ち
 といふ夷国此も
 のいさわるちん
 ぐといふが著書
 にいふ
 皇国ハ五穀此よ
 く熟する夏萬国
 にさぐれたらハ
 さらあり其余武
 勇此さかりある

劔刀此よくきる
 珠玉此まぐれ
 たる金銀銅鉄の
 品よろしきあど
 あげてかむへつ
 く
 皇国よも神代此
 文字ありといひ
 て越後の国弥彦
 社地にある石
 碑にありけあ
 るものを雕つけ
 たるあり亦こ
 かこの家よも
 傳ひ持たるも
 れど皆偽作した
 るもれあり
 皇国に文字なき
 をありおおもふ
 浅はうある者け
 しむざありさる
 ものあれこそ

らぬ食物も萬國みまぐれて多く音
 韻と言語の正しく妙あるも八十國
 八十島よ多ぐひあし今此夏を論つ
 らむ國よ何つたときむたあれど
 食物あた國ハあしされど木此汁を
 此と草の根をかえ魚の油をまぐり
 獸此肉をくらふ國此多かるを我
 皇國ハ五穀ハさらにもいさむ大魚
 小魚鳥獸蕪菜にいあるはでみち足
 ひて多くある夏亦たよべ此國や
 ハ何る人ふさかしたとおるるある

何れと言語ハぬ人も何らしされと
 夷狄此くみ人ハ鴉此さひづりに等
 しく犬の吠るに似てあるを我
 皇國此音韻と言語此妙ある夏ハよ
 く吹あせる横笛ハ八弦琴を合せ多
 らむが如し以て其證を説明さむ異
 國どもハ悉文字といふものを制作
 て音此符ときあそこの自己を尊大
 むとせる惡習にて人を教導べた法
 則あどいふこち多た夏を設けて文
 籍もも著し後世に傳へてむあと思

眞洲美刀鏡

日の巻

三

瑞穂乃金書

同一漢字も草書よりハ行書此が尊く見えそれよ
又佛国梵字蘭国此文字をどを
みるもいとくを
漢文に定格あり
故に古人此書を
種々の異説紛出
總て漢籍にハ以
つかり甚多しこ
治まらぬ故又時
々此酋長とも自
己を尊くせむが

あめは古傳をふ
みし虚説を説く
るありけり
佛国語ハ唐土よ
て譯したれハ多
く備はらむ名義
集といふよ
みあり
梵国字ハ皆點画
を組合てよ
むるあり則數點
を合せて
字字字字字
字字字字字
字字字字字
字字字字字
字字字字字
字字字字字
字字字字字
字字字字字

あれ 上古ハ神あうら言はげせぬ
國として 神の御代よ
く人此さあいらをばさ
圀あれバさる煩冗ハ
をバ制らざりしあ
にてハ同音ハ文字ハ
其る悉別あり其る
も已往と將來ハ辨別
らべも韻鏡といふもの
を詳らかにせば萬國ハ
ハさらあり鳥獸ハ鳴聲

べーあどことぐーた
と皆大きあるいらを
るべきところをこし
ハ一更毎一辭にては
とあしされど彼圀に
説も言語もあくなを
陀羅尼あといふもの
あハ言語ハ格もさ
唐圀よアハはさ
點畫ハ多ガひよて音
るれとあれバさる煩

真字鏡 上の巻 五 山崎惠乃舎成

S	R	Q	P	O	N	M	L	K	J	I
s	r	q	p	o	n	m	l	k	j	i
<i>S</i>	<i>R</i>	<i>Q</i>	<i>P</i>	<i>O</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>L</i>	<i>K</i>	<i>J</i>	<i>I</i>
s	r	q	p	o	n	m	l	k	j	i

a	あ	b	べ	o	せ	d	で	e	え	f	えふ
g	げ	h	は	i	い	j	い	k	か	l	えろ
m	えむ	n	えん	o	お	p	べ	q	きゆ	r	えろ
s	えす	t	て	u	ゆ	v	ゆふ	w	えん	x	えす
y	えい	z	せい								

この文字を合
 せ用ひて夏を
 足す故きむと
 煩冗一げもあ
 同小異ことあ
 同小異ことあ

Z	Y	X	W	V	U	T
z	y	x	w	v	u	t
<i>Z</i>	<i>Y</i>	<i>X</i>	<i>W</i>	<i>V</i>	<i>U</i>	<i>T</i>
z	y	x	w	v	u	t

a	あ	e	え	i	い	o	お	u	う
ba	バ	be	べ	bi	び	bo	ぼ	bu	ぶ
da	だ	de	で	di	ぢ	do	ど	du	づ
fa	ふ	fe	ふ	fi	ふ	fo	ふ	fu	ふう
ga	が	ge	げ	gi	ぎ	go	ご	gu	ぐ
cha	が	che	げ	chi	ぎ	cho	ご	chi	ぐ
ha	ハ	he	へ	hi	ひ	ho	ほ	hu	ふ
ja	ヤ	je	え	ji	い	jo	よ	ju	ゆ
ka	カ	ke	け	ki	き	ko	こ	ku	く
la	ラ	le	れ	li	り	lo	ろ	lu	る

これあり常世書
 記にハ草といふ
 べき體までかく
 あり
 其十品詞けさは
 ハまづ

第一名言 男性、女性、中性、
 兩數、做小言
 三格
 第二節言 定汎
 第三形言 階級物質形言
 第四代言 三人品 主物疑問
 指示承接
 第五活言 能所自復
 物異韻 同韻
 不整分言 三世 四法
 第六數言 定汎
 第七添言
 第八冠言 離合 固着
 履言 履字

ma	ほ	me	め	mi	み	mo	も	mu	む
na	な	ne	ね	ni	に	no	の	nu	ぬ
pa	ぱ	pe	ぺ	pi	ぴ	po	ぽ	pu	ぷ
ra	ら	re	れ	ri	り	ro	ろ	ru	る
sa	さ	se	せ	si	し	so	そ	su	す
ta	た	te	て	ti	ち	to	と	tu	つ
va	ふ	ve	ふ	vi	ふる	vo	ふる	vu	ふる
va	わ	ve	わ	wi	わ	wo	を	wu	う
za	ざ	ze	ぜ	zi	じ	zo	ぞ	zu	ぢ

此外攝音法あれども大か多同どさ

第九綴言
 第十挿言 假用言
 羅甸語 額刀西詞
 佛蘭西詞 英吉利詞
 ありあり三格ハ
 彼国古代ハ六格
 ありしを中ころ
 四格とあり今世
 三格と定まりた
 るあり がらむ
 まちか 四格
 とありハ四格
 ろちん 韻府語學
 汴源 三寶境刊
 文範 どのハ皆三
 格あり
 さてかく 蘭土文
 範ハ変をこぢた
 く記をも用あき

はあり其十品詞といハ 名言 節言
 形言 代言 活言 數言 添言
 冠言 綴言 挿言 三格と
 ハ名言といハ中ハ 主 客 介
 とありこれらにそ言語ハ格率志
 ぬべければまづハよ語ハされど
 皇國に多くらべてハ拙き更甚し志
 加ハとあらむ唐土をばハめ佛の國
 より西洋諸國ども何ふよりそ物
 此名詞の活用を定よりといハ傳
 説もなく一つとて更ハ意をいハ

よ似たりされど
今世彼国に學さ
かりみ行ひれて
ことごとくよろし
きことに思ひ居
る人多きまよ
わが書記して我
皇国に言格よ似
るべくもあらぬ
をあらせむのこ
ろあり新奇を
好むとお思そ
今とても地球一
統驚くと感づる
とかあゝむと
聲あゝといひ
笑ふ声泣く声あ
どハ皆同一あり
これ情に變りあ
けれバありいづ
くハあれと木を
きる丁々水はあ

のうゝ潺々風は
ふく颯々ハカを
るべからむ
何らんひらく
西戎が五大洲と
定めたる中ハ地
の正首ありとて
神の州といふ意
みて 皇国を始
め支那此邊を
あゝやとよぶハ
もと我あゝをら
とつゝる名れよ
こあまれるあり
亦造化ハ神をい
ざあ天といふ目
ありこれ我
いざあだのかみ
をよこあまの傳
へたるありと説
へりげよさもや
ありけむ

かゝる則唐土みて山をさんとよび
川を勢んとよぶ其さんとよびせ
んとよぶ理以かよといふこと我知
らば佛國よて廣大なるをまかとよ
び智慧ハ極をまんにやとよべと其
理を―およしなし蘭土よて水を
あゝるとよび日をぞんとよべと
れも其理を―おかゝる妙ありや我
皇國ハ水をみづとよび火をひとよび
山をやほとよび川をかはとよぶ其
理一つく明らにわかるべきは多へ

何るありきて八十圍八十嶼とも
言語ひとくからむさほくよかは
るハ雲と泥との如くされと開闢
よハかくむうりたがむさむけめど
代々ふかり年々ふうつを行けむ
今世も物ハ名あどよハ同じあるも
は、何り佛國よて天をそらとよぶ
も 皇國よ同ド亦佛國にて鴉をか
かゝかとよび蘭土にて雷をどんでる
とよび唐土よても木を打たる音お
ておくとよび火ハ燃る音にてくハ

唐土此三五曆紀
といふ書に天地
此をトめ一人の
神ありて其神の
両眼日月とあり
血液ハ川とあり
きかどかけるも
自然我 皇国此
古傳説も似かよ
ひたり
西戎此説も地
球の中はても熱
国の人ハ慾心甚
しく寒国此人ハ
強暴ありとソハ
中和此国にハ多
く聖賢の人を出
きといつり
異国とも此か
よも 皇国此如
く血系もて君上
此位をふむあり

とよび土を踏たる音もそどとよび
金を打つる音にてきんとよび水は
流る音にてすいとよび雁はあく
音を聞てがんと名づけ雀はあく聲
よてトやくと名づあつる類いと多
かまさもあるべた夏よあそ今かさ
ねて論をむ八十囿八十嶼とわかれ
て風俗と飲食とのながひらそあれ
目此色を視耳此聲を聽鼻此臭を嗅
ぎ舌此味を辨ふ舌よかそアハ何ら
ト志からバ言語に異ある夏もあか

合衆共和とて四
五年にて首酋を
かふる国ありて
さほぐよかふる
あれどもべて開
關以來連綿と
天子天孫の志ら
しめを国ハ一國
もあきありげよ
皇国ハ地球此元
首なるハ其精神
たる 君上の血
統うごき變る夏
あつべくもあ
これ空言あらむ
實證あり
人ハ萬の動物よ
すぐれたるハ靈
妙ある精神あれ
バあり精神此作
用のうち言語ハ
殊ハ靈妙あるも

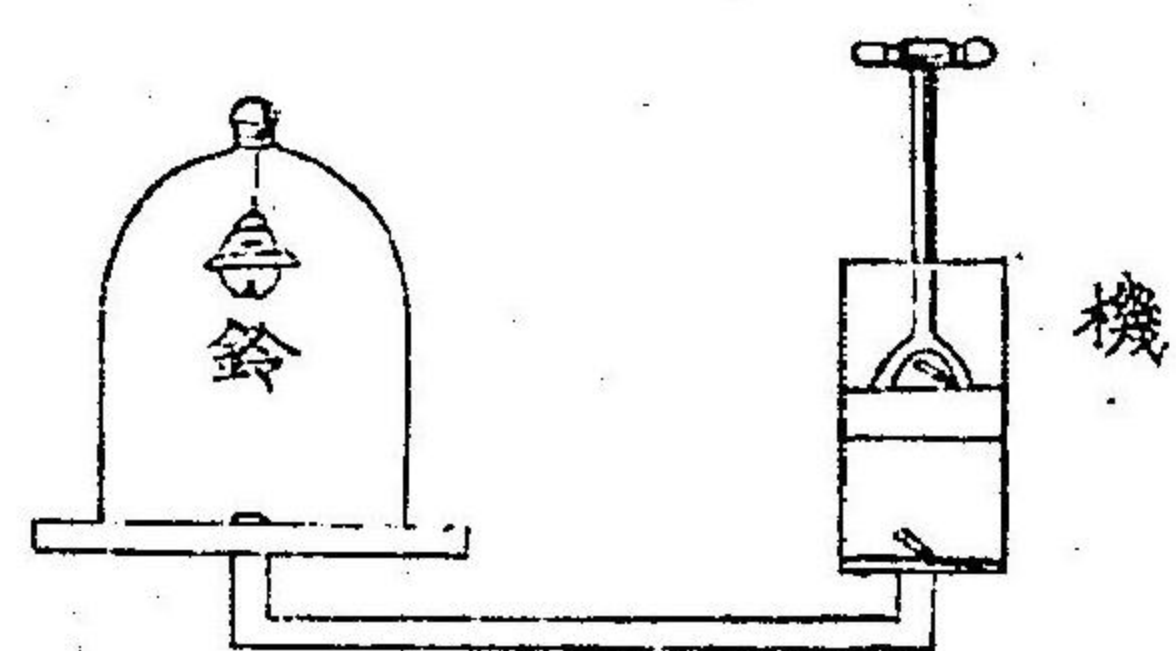
らむを異囿ともハ 皇囿此如く天
つ日嗣連綿よ宇内を照臨もあつる
ハ上古此正傳あつ小きハ一記者と
も此淺をのあつ智にて夏を設くる
あれバおれく心々よかハアゆきた
るあつけりよく思ひめぐらむべ
一人此靈妙ある精神の大表よあら
ハるハ言語あり此言語あるよよ
りて君臣の義父子此親夫婦の愛も
アかつべく古昔此夏を今世に傳へ
賢一愚あるけぢめもあつるべきあり

て笑ふべきことあり
 音韻は理ハ音韻のうへに論ふべし指もてさし目もて視て定むべきことにあらざらむ
 西戎のやれども音韻の理をアグろにときとるもあれともて淺智けえみいぐろもてときたれバさらよめぐらしきときこともし
 あし
 まて人け智もて造りたるハ一アより打聞ハハげよさもやと思はるれといま一

土よてあえいおうと順まる
 ことよりハ口は開く象くさによれ
 ありそハ第一にあとよべハ口は開くる象十五日は夜の月は如し第二にえとよべハ十三日は夜の月は如し第三にいとよべハ十日は夜の月は如し第四におとよべハ七日は夜の月は如し第五にうとよべハ四日は夜の月は如しこれもはと其理一アたをきとえたりされどよくおもへバともに淺をかある

たび考もてゆけバ笑ひつべきこと多きハあり音韻ハ物體の硬軟よりて空氣よひぐくカは多寡あるあり故ハ眞空氣の所ハ音響あり近世西洋の戎人が持まわり來し器排氣鐘といふハ其鐘内は鈴を繋ぎこれを振れば其音いとさやうあり機を動かして氣を排洩し再度これを振動せば少しも音響あることあり則略圖左に如し

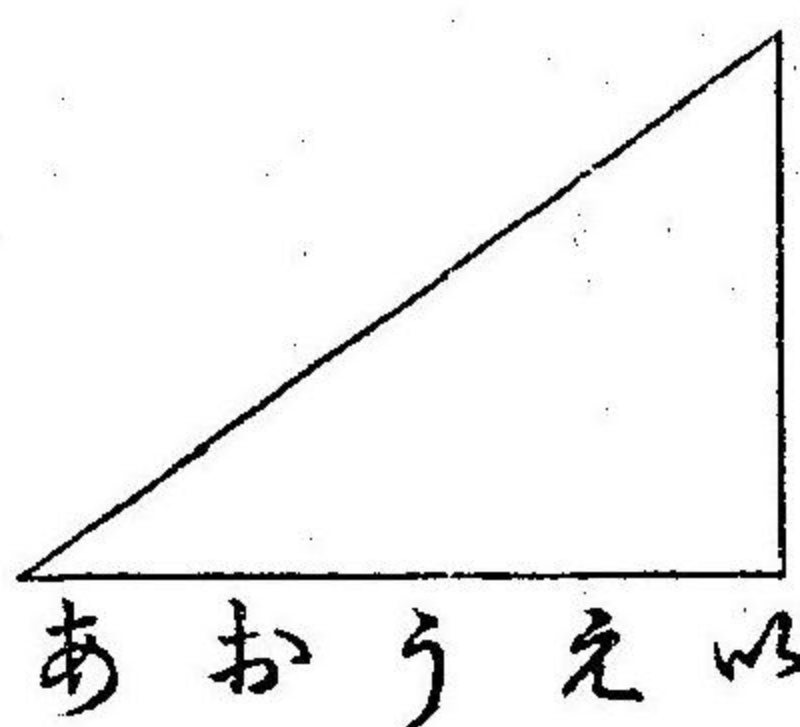
誣ことあり 皇國は音韻の順ハあ
 おうえいありあれ音は強弱よ
 よて 産靈神は定め多はへるあ
 り此音韻は強弱といふハはづまべ
 ては音ハ皆物體の剛柔硬軟は差よ
 よりて音響はをげとゆるきと
 空氣は觸る力はつよたとよとき
 とよつきて出るものあり今あとよ
 ぶとたハ口内は十分は空氣ありお
 とよぶときハ八分の空氣ありうと
 よぶときハ六分の空氣ありえとよ



此排氣鐘もて試むるも真空中もてハ物の輕重おし一羽毛も一彈丸も同時間も墮るあり此排氣鐘もつきくさくは論あり予が著せる國の御柱も詳あり
音韻ハ強弱の象ハ數學家の所謂

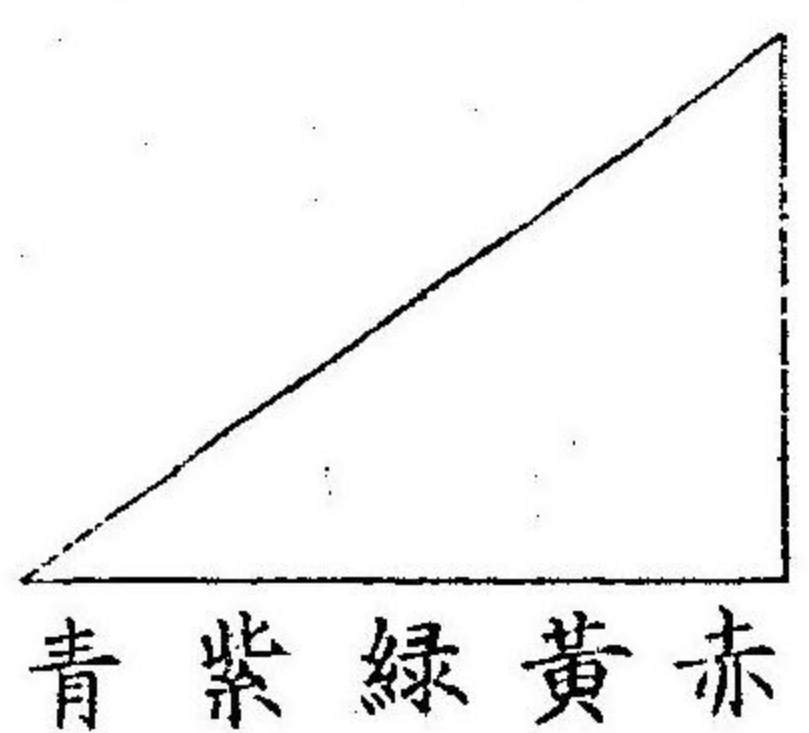
ふときハ四分ハ空氣あり以とよぶときハ二分ハ空氣あり此空氣ハ多寡によりて音に強弱ハ差ひあるあり則あハ五町遠く響たおハ四町遠く響きうハ三町遠く響たえハ二町遠く響き以ハ一町遠く響くあり亦力ハ強弱にて示さハはづ十貫匁ハ重さを載べき車に二貫匁を載てこれを引けバ力甚輕たよる車をとりて空氣を顛動をこと最多くて。がらぐとありりるある又其車に四

拘股形もひとし則圖の如し



此音韻の象はとあらざ光ハ強弱もより色を現す理も亦此勾股形ありをハ暗室も一少の穴を穿ち大陽ハ光線を通らしめ其光線のところも勾股形ハ硝子盤をあらは諸色を現ハるあり則圖のごとし

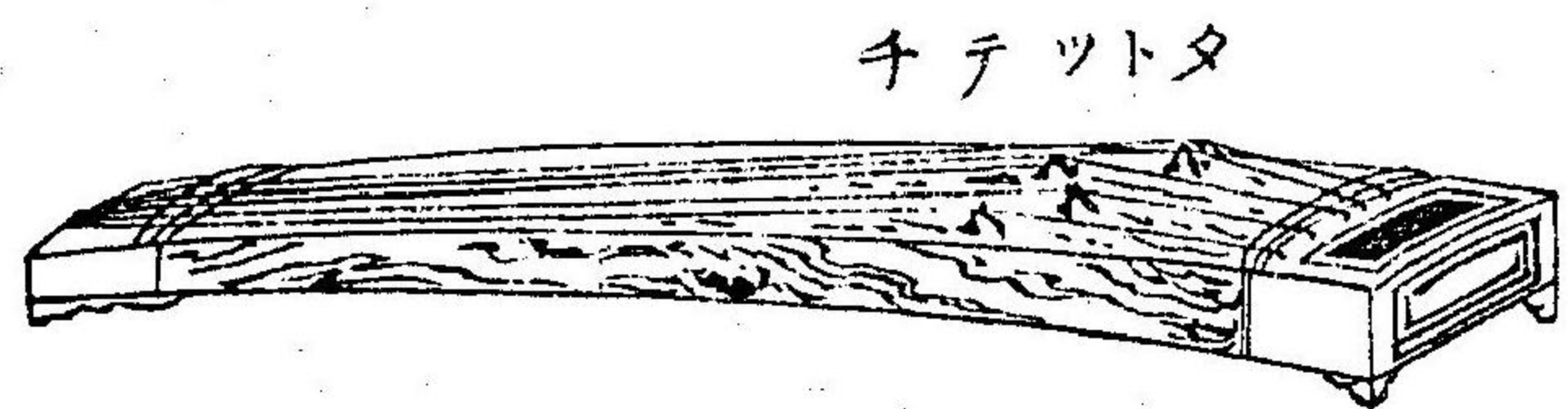
貫匁ハ物を載てこれを引けバ力や重く車ハひびきたもやまくあく。ごらくとありりるある又此車に六貫匁ハ物を載て是をひきバ其力やまく重く其ひびきたもやまく少くごらくと鳴りりるある八貫匁ハ物を載てこれをひけハ其力りよく重く其ひびきたもひびきたも少く。おれくとありりるあり載て十貫匁もひびきたも力きを免て重くもひびきたもめて少く。ぎりくとある。此からごらくごらくげ



音韻の理も光色
此理ももとの無形
の作用もて其元
因相とわらうらず
あむ
琴も 大皇園の
ハ和琴とよぶの
ハ六弦あり上古
此ハ糸此數も定
かあらねど六弦
みてこそこそべき
も此ハ其理ハ五
弦よと音ハ表よ
ア裏よかりう故
六つよてあうら

もよし
カコクケキカ
○○○○○○○○
か
こく子圖せるハ
音此理を示さむ
たぬは五弦よ
う
笛此圖も同じみ
る人あやしとあ
おもひそよ
西戎此もの共ハ
理をゆふこと殊
よこそし其う
ちハ天測地量玩
器ども此新奇あ
るも多くげよ
く考得たりとお
おゆるもあれど
音韻言語の根元
あどハさすう戎
意のさかしらよ

れだりハ則音韻此順あり又樂器
ともをもて詳かよ示さむ



チテツトタ

琴

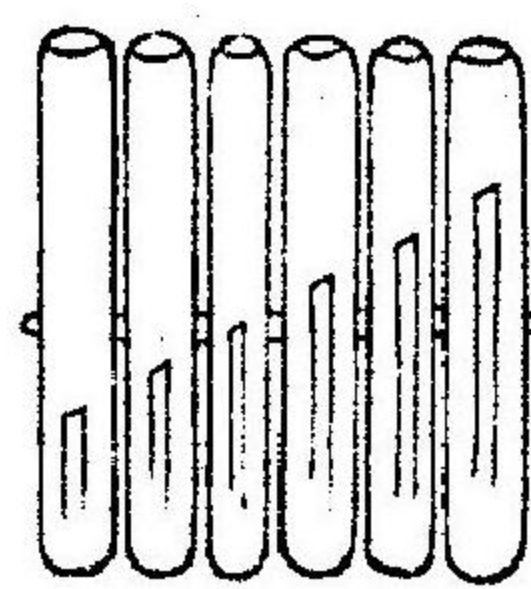


リレルラ

笛

キケクコカ

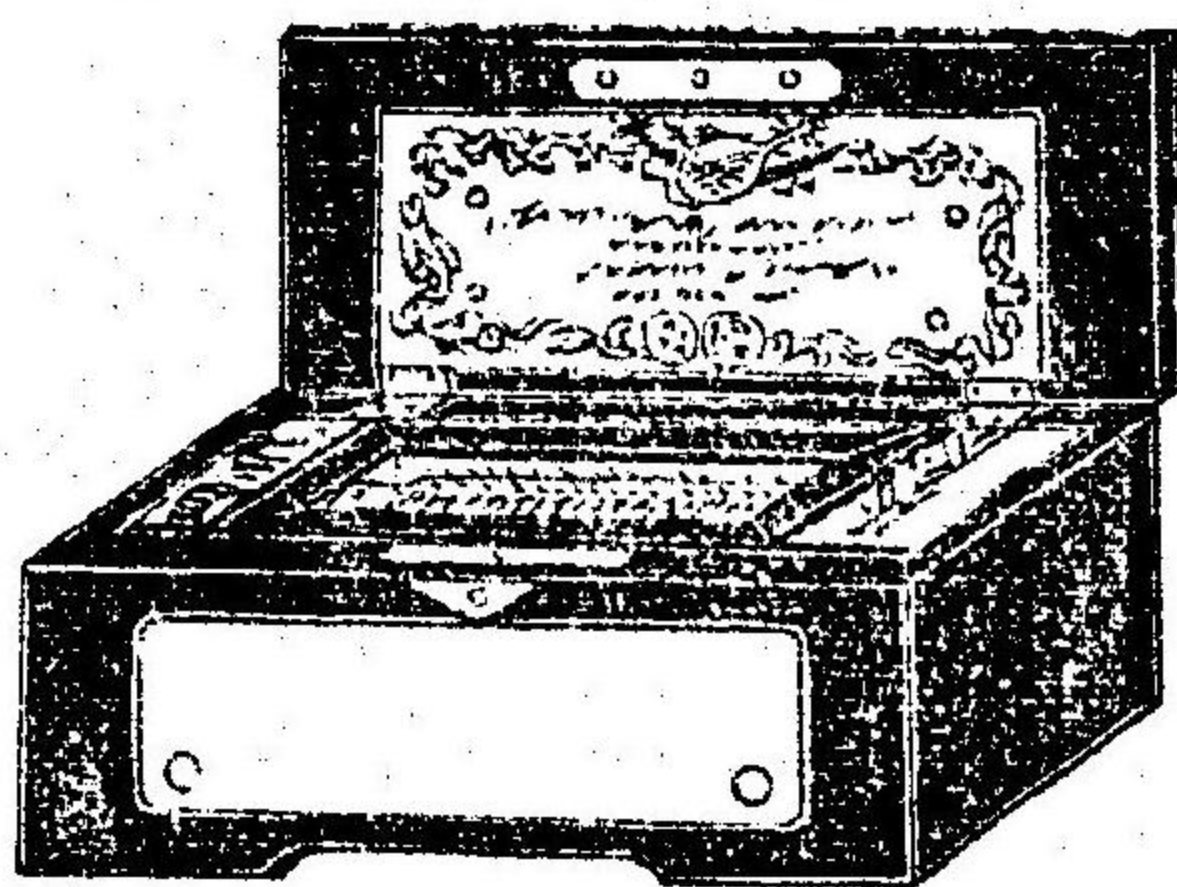
律管



キケクコカ

オルゴール

器國戎



此諸器此うち琴こそ我 皇園此樂
器なれ其外すべて此樂器ハ皆異園
より持はぬき多るも此あてされど
音韻此理ハ志ひが多きもれよて皆
多とつてちらるれアかこくけき
と順まらるあを然るに彼我園ともハ
理にこち多き習ふれどさもが頑愚
れさかしらハかぎアありて得さ
らざアけアさて彼五十連韻と
もの順次あかさる奈ははやら
とせおハ喉哉初と一牙齒舌唇とか

て考ふべきあり
 糸バあぐらぬこ
 とをとりあり
 今五十韻を記せ
 る書よ
 ありや喉たらあ
 ハ舌よか牙さ齒
 はは二ッハ唇の輕
 重とりよ訶あり
 此内よはの一行
 ハ齒の音あり唇
 の音よあらず
 ある人我真州鏡
 の音ハうちがだ
 ざははは五行を
 濁音あり決て五
 十韻よて正一か
 るべしそハ
 皇圀よて濁音ハ
 もの言語の首よ
 ありことあけれ
 バありとこれ甚

そへ多るあり蘭土ハあべせハ順次
 ハ 大皇圀ハ以迄は訶などの類に
 や其理ハ定りあるハ志アが多しそ
 けうへ彼五十連音あべせハ音韻と
 もに正しからぬことありそハ彼
 五十音韻ハことをさと訶とてあ
 べや喉。多らあハ舌よ。か牙。さ齒。はは
 け二ッハ唇ハ輕重。とよああははづ
 喉に。あわや。ハ三行十五音あり舌よ。
 多らあ。ハ三行十五音あり舌よ。牙よを。
 加ハ一行五音ハ。齒にも。さハ一行

たがつり五十韻
 の内よ濁音あり
 ぬとりの一行も
 皇圀言語ハ首よ
 あることあきを
 やかりかとかと
 さとぎと其つか
 ひごころいさく
 かをり則いさ
 いごさかさがお
 だらかきおどら
 かどあどすて
 雲泥ハたがひあ
 り此別よ清濁
 定論よあ
 蘭土ハ外おろし
 やあどいお圀ハ
 音ハことさらよ
 皇圀人よよび得
 がくきもの多し
 言語の格もい
 く蘭土よたがふ

五音ハ。唇に。はは二行十音ありこ
 れ正しからぬあり喉と舌とに十五
 此音あらハ必牙よも齒よも唇よも
 十五音ありべきことありあらむや
 又蘭土ハも 皇圀人によびえが
 き音あど數多ありて音ハ數も二十
 餘り多しこれも以と正しからぬあ
 りされバこそ鴉ハさむづりに似犬
 け吠るあせりといふあれ
 大皇圀ハ真州鏡ハ音の順次ハもて
 に説つる如くあおうえハ順にて

めり
蘭土の外西洋諸
州は通用の語あ
り彼其語をらて
んとよぶあり則
蘭土よて萬物に
理を究むる學術
をバあちうらき
むでとよびらて
んみハこれをハ
ひーあとよび蘭
土よて物にもと
を分離とち學術
を志けえきむて
とよぶをらてん
よハせみかによ
みれたらひあり
音は輕中重此三
つを平上去此三
つとあれバおの
づから十五音づ
ゝ七十五音ある

喉より初は唇齒舌牙と次して其
韻は輕きと中あると重きとあて
喉にも唇よも齒よも舌にも牙よも
みあ十五音づあて合せて七十
五音あるありかくてこそ正しきこ
とありあてけれ其さばを圖きて示
さむ
左筈にけハ本音あり則あハ喉
ハ本音よて重き音わハ中ある音や
ハ輕き音あて

づきあり
下此圖あり
よ至る頃も彼勾
股形あり
五十音を皇國
此古傳ありとし
かり反切の例よ
あらひ皇國此
古言此上よも延
約とゆふことを
定めてとくこと
とあれりこの中
らるより此習ハ
あると近世此名
哲さち多かりけ
れども此ことよ
ハ皆まよへり則
かくらふハか
る此延うらふ
ハうらふ此延名
れらさハハ名れ
ハの延家れらく

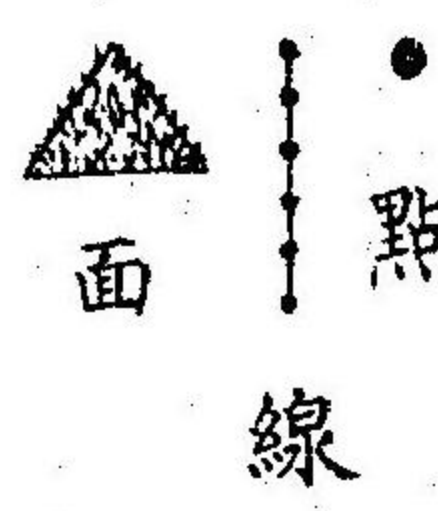
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か

輕中重輕中重輕中重輕中重輕中重
牙の音舌の音齒の音唇の音喉の音
此あハ音を唇にひがかしてよぶハ
おとあり齒よひがのせハうとあて
舌にひがのせハえとあり牙にひが
のせハ心とあてたり又ほハも此三

ハ家のれ此延あ
ど又ありきハあ
アけりの約亦ハ
上略中略下略さ
まく古言を自己
此識まで説こと
多しこれ甚証ご
とあり阿あか
こ異園此例よあ
らひて 皇園此
雅言をど記まぐ
るあられ
此更の外此悉曇
此うつはる漢籍
よみの混乱たる
猶多し別よあが
つらふべし梵語
を混へるハはし
らはたらあとな
り
今樂器どもをも
て調らぐ考ふる

音ハ唇ハ本音あは則もの音を喉に
ひがうせてよべハはとあり齒にひ
がうせてハむとあり舌にひがかせ
バめとあり牙にひがかせバみとな
るあを又ふすずハ三音ハ齒ハ本音
あり此ふの音を喉にむがかせバは
となを唇よむがうせばほとあり舌
よむがうせばハひとあるなりまさて
れねハ舌ハ本音きまぢハ牙ハ本音
ありすべてなぞらへてしおべし又
異園音韻ハ律よ四つありそハ平聲

もも三調ハくよ
入声の調ありと
あしをぐて異園
どもハ正し加
らぬくと多し
萬物三ハ數よ飯
すは更ハと妙あ
るもハあり數學
家よても萬象ハ
あは所由を推究
まると三つあり
則



あれあり萬象點
より起て此點連
ありて面とあは
面よて始めて物
象とあはあり此
理數學上よて必

上聲去聲入聲あり此うち入聲ハ鳥
獸ハ音よひとく正しうらぬあり
大皇園にハ平上去ハ三聲ハあは此三
つハこにて正し此理ハ世ハ中よあ
らゆるもの悉三つハ數にてはくせ
おものあれを自然さあおべきあは
聲ハこにも阿らび人ハ言語も數十
萬限りもあく多かれどあは三ハ外
あしそハ形象ある物をよぶ言語と
物躰ハ活用をよぶ言語と詞ハ自他
と已往と將來も分つ音とハ三つあ

須知此も此あり
地球中ソグれの
園此言語も品類
こそかちれ皆三
つ此外ありそハ
世間又躰と用と
此語さてハ助辞
の外あけれバあ
り
異園どもハ大か
と用言をさた
し躰言をけちと
すひとを 皇園
ハ躰言を先とし
て用言を後よす
るも何や一ある
人此を論らひ
ひらく 皇園
ハ上天子より
て下万民を御し
異園ともハ下よ
りけりて君上

の位をふむ則
皇園ハ躰をもと
と一異園ハ用よ
り起るゆゑこれ
ありとげよさも
ありぬべ
此名と詞と結の
三つの理けくを
しきをバ真州鏡
みよまれときこ
とれとちまひ
ふべ
平上去れ三声も
皇都ちかきまた
りこそあれ東園
れえ西園のそ
てあどもハ其
かちあきとち
れ多
同ト語もとも名
と詞よてひく
くちか

足則

このハ形象をよみ音やまかハの類
このハ所為をよみ音ゆくのみハの類
このハ詞の自他を分音ハハの類
あの三つよすだむこれ理ハ次々と
き示さべ一其平聲上聲去聲の足か
ちハ則
日ハ平聲 毛ハ平聲 橋ハ平聲
樋ハ上聲 楚ハ上聲 端ハ上聲
火ハ去聲 氣ハ去聲 箸ハ去聲
弦ハ平聲 これらにて志るべ一も

釣ハ上聲 と日も樋も火も同音に
鶴ハ去聲 て語れ根元も同ドあれ
ど平上去れ別にていさかのため
ひあるありさて同ド音ある語ハ其
意も同ドある證を示さむためハ類
語を出してこゝに志れさむ
日 梭 樋 氷 あれ意大か
物をとねまことにてよく聞ゆ
橋 端 箸 背 此意大か
此物を一りよひきよまれこにて
聞ゆ

ものあり則木は
はつ人をほろ酒
のかき物をかき
れたぐひ
亦詞れうちみて
も内言二言れ別
ありてそれ意や
あるかよ則人の
くろ糸をくろ物
をまろ度まろ
れたぐひのごと
し
人皆文字のよ
目馴て我 皇國
此雅言をも其つ
らよ思ふ故其根
本をえ悟らぬか
り
日ハ上天より光
を下して躰品れ
極微れ空隙を通
じ梭ハ機れ糸と

いと此間をとほ
し種ハ彼所より
此所よ水をとわ
し水ハ硝子様よ
まきとわり火ハ
物躰れ極微れ中
をもとわす其理
もと一つありた
び平上去れ三声
の區別あるれ
あり橋ハ此岸と
彼岸れうつりを
あめ端ハこよ
りかこよ移る
あひご箸ハ二本
れものよてはさ
む用をあし箸も
箸と同用のもれ
あり
白ハ諸色をおく
びきもれ城ハ諸
人をおくべき所

白城代 此ハ物をとどおく意
にて聞ゆ
穂帆秀 此ハみく程かよけが
る意にてよく聞ゆ
身實箕 此ハ内よみつる意に
て聞ゆ
子粉 此ハこほかある意に
て聞ゆ
葉羽齒端 此ハれび開く意
にて聞ゆ
洲巢酢簾 此ハまぐあつむ

る意よて聞ゆ
堰關咳 此ハひろきを勢バむ
お意にて聞ゆ
村群 此ハあめほりまとは
る意よて聞ゆ
芽目 此ハむらたみる意に
て聞ゆ
世夜箏 此ハあつまる意よて
聞ゆ
緒尾 此ハむもぬ意よて聞
ゆ

代ハ物をおくべ
 きあて則むら
 ハ身一ろくあ
 ちハ足一ろく
 や一ろハ弥一ろ
 あり
 穂ハ葉間よふ
 ほう秀てけむ
 も此帆ハ風をふ
 くみたらうも此あ
 り
 身ハ精神をみて
 たる物實ハ生育
 此きざ一をふく
 む物箕ハ實を止
 むる器
 子ハちひさた人
 粉ハちひさた物
 あり
 葉ハ躰ある物よ
 り此びひらける
 物羽ハ鳥の躰よ

り此びひらきた
 る物齒ハ頤骨よ
 り此び出たるも
 のあり
 洲ハ水中ハ砂土
 此會まりとる所
 巢ハ物をあつめ
 て鳥此をむ所簾
 ハ竹をあつめて
 あみとる物あり
 堰ハ廣き川より
 狭く水をせくも
 此関ハ往來をせ
 バむるも此咳ハ
 呼吸をせバむる
 病あり
 村ハ人此あつま
 りむすむる所群
 ハ物のあつまり
 むすむる意あり
 芽ハ草木此ひら
 き出で躰をあら

此ほか多しきべて類をあらふれば
 其意あらるゝあをさきて日ハなに故
 よ。とちこれ意。めハ何故よ。ひらく意。そ
 とつふこととつりも一りく明りあり
 その眞州鏡此ときごとこのととらに
 詳りよつふべ一さて人此言語ハ數
 萬限りもあく多あれど名と詞と結
 との三りよかぎれるにつきあや
 此理あり此よ此あるよ何らゆるも
 の悉三此數をもるゝ物あ一これ天
 地此開闢此時 三柱此神萬物を

造化は一ませるよよれるありけり
 されバ其三數ハ
 日 地 月 これ三りの世界あり
 此あめとつふハ漢土の天とつふ蒼
 がたる虚空をさしてつふよ非ず天
 日をさきとあり上古日ハ頭の上にあ
 己月ハ地の下にありて動轉ざりし
 時より此言あらハ一にて上哉何免
 といひ地下をよみとつふなり日も
 月も地球此如く人の住居るべき園
 土あり此證古典説に明らありさて

萬物象をひらき
世ハ上下萬人ハ
あつまるる夜も
人ハよりあつま
るあり竹比節と
節との中間をよ
と云も同ド
緒尾ともよむ
びつあぐどとら
あり此外類語數
多かりあざら
しづべきあり
あ免つちよみハ
説ハ服部中庸ガ
三大考平田篤胤
ガ玉比真柱よも
わ論へりさて
近世西戎ガ持ま
めき器よ日を
みる鏡ぞんがら

き月をみる鏡は
んしびど
ものあり其外日
月比遠近大小を
測量るおくたん
とあどいふもハ
よく窺望して衆
人日月星ともハ
一箇ハ世界ある
変をあり初て驚
歎すもとより我
典墳ハ明證ある
をあらざればハ
萬物比形骸ハ三
つあるハかの
三神造化の理ハ
あをせむとてあ
ひて定めとらよ
ハあらず衆人ハ
みる所をさして
いふのと遠き西
戎ハもれど

萬物の形骸も三種あり則
凝固體 此れ石金土木 此れ多ぐひ
流動體 此れ汞水油 此れ多ぐひ
氣象體 此れ風 此れ多ぐひ
近世西戎ハ説ハ 神聖萬物を陶冶
たゆハ作用三つよまきとといふこ
と發明せりとそハ
めかにかみすこハ形器の機能といふ意
せみはこま 此ハ分析の機能といふ意
でいあすみま 此ハ無形の機能といふ意
これありさて金石ハ凝固油水の流

動をははる地球ハ運轉海水ハ満干
まべて器械底ハ機能をさしてめか
ますみうすといひ飲食を消化して
血液とあり異類ハ物質を合和せて
一體となし一體を分離してもとの
異質とあす機能をせみまみうすといひ
光。温。雷氣。磁石力。あどの測
量アてあり得か多き物ハ機能をで
いなみまみうすといふとぞげふさ
あるべきことありされど彼等ハ
三柱ハ神の造化よよりて其理も三つ

萬有三此數も版
まらハ何れゆゑ
よしハあらね
どもげみくあや
しきもれありと
いふことをかく
まぐさけり日月
星此たぐひも三
種ありとぞそハ
我日たぐひ天
躰此うち多し
則二十八宿あど
名づくるも此皆
これあり亦我地
此たぐひも多し
則土行星と名づ
くもれこれあ
り亦我月たぐ
ひも多し則五行
星此附屬此小星
これあり則三種
もそ

恒星 我日のた
遊星 我地のた
衛星 我月のた
これありこれら
此論我著せる国
の御柱は詳うこ
造化の三作用此
うち形器機とい
ふハ則か此西戎
が理學此家言よ
所謂引カ聚カ彈
力重カたぐひ
ありさを其引カ
といたとくハ油
と水と一つ桶を
ひれてこれをか
きまぢらよ水ハ
水油ハ油と別れ
て混らずこれ水

よ止るといふことハ古傳あきよよ
りてえあらぬありけいささて此
三神の造化此理よよりて言語も三つ
よ限れりそハ

名 山川人鳥 あどまぐて形象ある物
詞 行思食 あどまぐて作用をよ物
結 びざゆゑけとハも あどの助辭

によぶもの

此三つありさて名ハ其よび音轉の
む則山をバ。やは。とけとひ。川をバ。
かは。とけみひふあを詞ハ自他此弟

ちめ何とて其音轉くあり則



あどの如く五音此横のうつりによ
りて未言現言去言自言他言の別ち
あるあり結ハ詞と名此間よ何とて
言語の自他を結ぶあり則 びざハ人
を誘ふ助辭あり びざハ物を疑ふ助
辭あり びざハ疑ひて言きるあり け
ハ去りし夏を言きるありたとく

凝りて雲とあり
されど無形作用
よる雷氣を含く
て氣中より流行す
さて其雷氣去り
て雨とありてお
つるこれ又形器
作用なり此水鉄
管を紅燒し其中
をこみせハ水此
本質水素といひ
も此と酸素とい
ふものよりなる
とありこれ分析
作用あり大かこ
かくれごとく
兒をほらむ妙理
ハ人此智慮よる
しもべきありず
されど 神代の
正傳ありて其妙
理此起原をハか

づくさくらるべし
耳此音を聞も耳
の内は膜ありて
音響をうけ其音
響を神識みよる
も其作用此さま
ハさもあつべく
おむゆ目此色を
視るも硝子様の
眼器より光線を引
接して神識に觸
覚せしむ其作用
此さゆこれもさ
もとおむゆ鼻此
香を嗅ぐも舌の
味を辨するも又
其作用おしもあ
りつべし男女交
接して受胎する
理ハさくらあり其
しもさくらげよと
おもはるる少

一名

二名

言名

内言

二言

名の三條

やほかいひとみづあどよて轉活らす

則やほをやもやむといをれぬが如し

さけか糸かぜれたたぐひさかかあかざ

と轉活くあり則さけ表名さか名と云こ

あふぎこちをとおび此類あり則あふぐ

物をあふぎこちを物をこちをといふこ

詞の三條

我ハ彼よかすをらす彼ハ我よ拘をら

ぬ作用則ゆくはむいふうつれたたぐひ

彼と我我と彼との両方よかする作用こ

則もゆる記ゆるをさるあどの類ひ

外より來りて我耳目鼻口意よ觸て

ある作用則さむくあかくるるくあ

とれたたぐひ

結此三條

内結

詞此内よて自他を分つあり則ゆくハ

現よゆくありゆけハ人よおあまらあり

詞と名此中よありて自他を分りあり

則いざはづゆ急けをあられたたぐひ

詞と名此外よありて自他を分つあり

則ハもよれたのやああどのたぐひ

外結

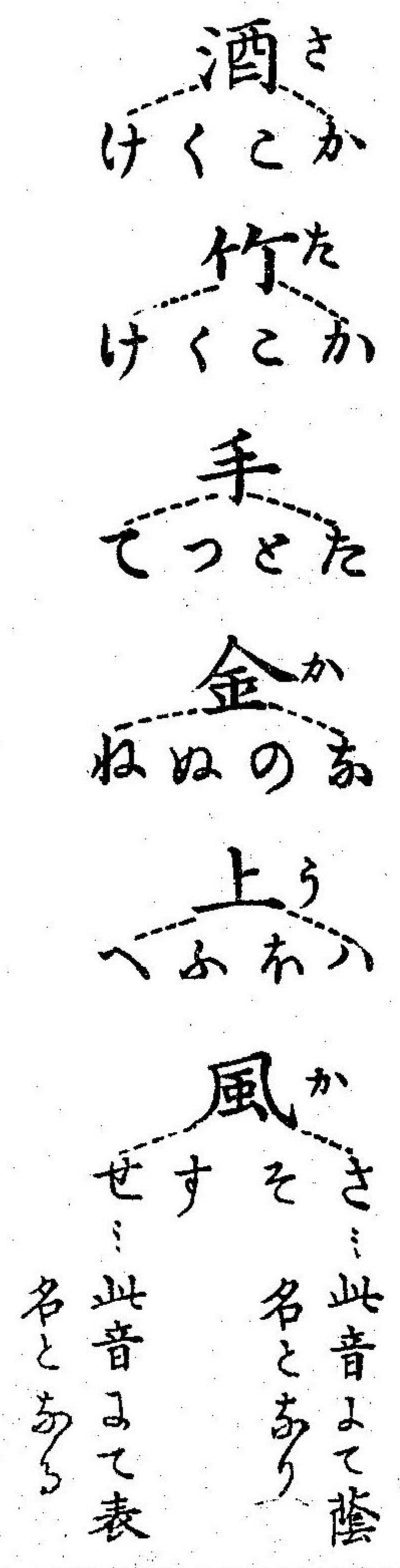
中結

一もあぐこことよ
しるざれをさあ
げよめくしきこ
とたとへむよも
れあしこれよて
も人け智慮よハ
かぎりあつむれ
よて其真理ハさ
とり得かあきを
あつべし
名よ三のあつも
自ら造化此理數
あり
三神造化此理を
大よそとつかハ開
闢此時よ
天此御中主此神
高皇産靈此神
神皇産靈此神
此三柱此靈妙あ
る作用よよりて
萬有を制作した

此九條ありこれよて言語此大む祓
を括まり今つはびらかよ此九條を
ときしめさむはづ名ハ總て形體あ
るもれよて耳此聞づく目此視づく
鼻の嗅づく舌の味あべく皮膚の觸
て知べきも此皆名あつあり其名よ
三種あつ理ハ彼 三神造化の妙あ
る作用よもとづくもれよして則形
體此上よても三種よるかるあり
そハ一名といふ種類ハ形體顯明よ
して移轉らざるもれあり山川人水

まよ則形躰をバ
天此御中主此神
此造りはし血液
運行艸木榮枯よ
いづるまてハ
高産靈此神の附
與たまひ精神
をバ神産靈此神
此附屬したまふ
ありけり此克墳
與實證明うあ
る後世まごも此
克を哥よもよめ
り拾遺集よもき
みえれバむまび
の神ぞ恨めしき
つれあき人を何
つくりけむ亦
板衣よもかく造
りおぢくこをさ
せけむむきぶれ
神さく恨めしと

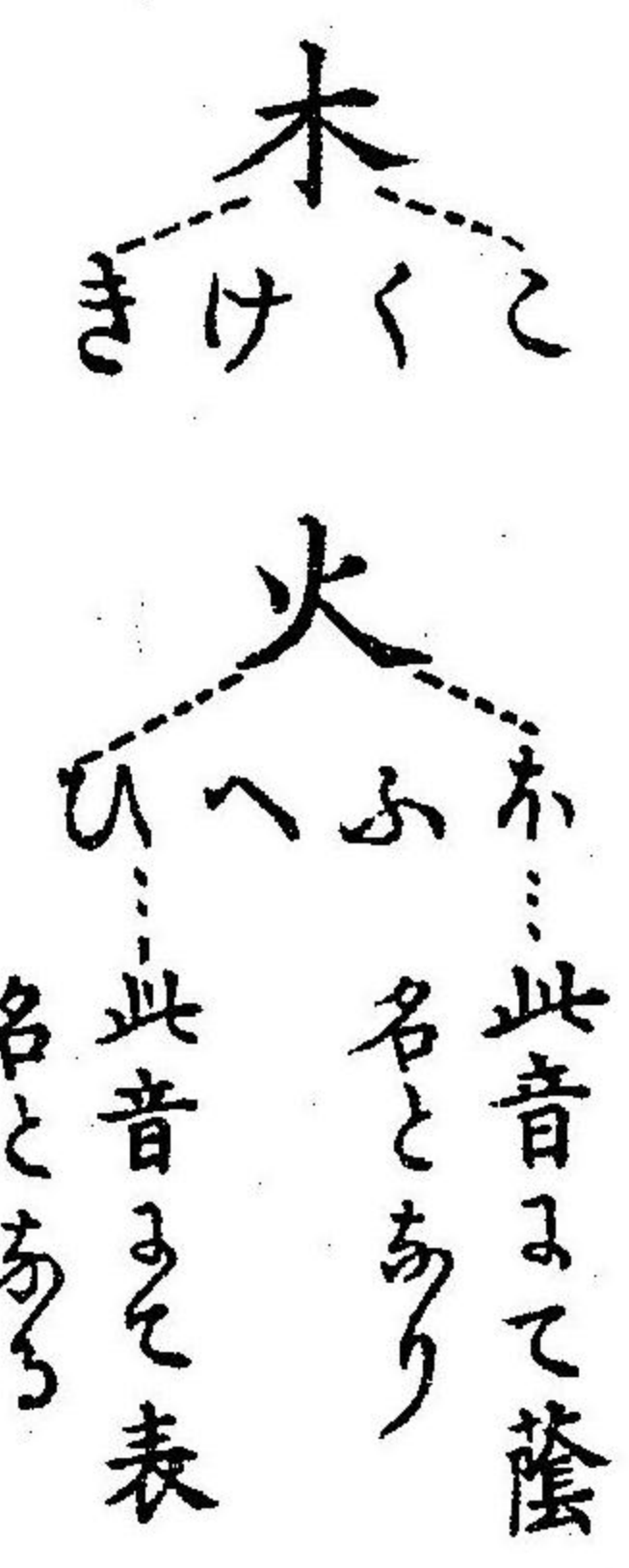
海魚雲石あどこれあり二名といふ
種類ハ活用運轉く意此あつ形體あ
り酒竹木金風稻目手あど此物品こ
れあり此種類此名ハ表と裏との二
りよ活轉らくあり其活轉くさはも
定格あり則



此音よて陰
名とあり
此音よて表
名とあり

云々 亦千載集
よも(こ)ろさへ
むまぶ此神や造
りけむどくろけ
しきもみえぬき
みのあ、あともあ
り此ころまでも
産靈此神人をつ
くろとつろを
もおもへ五識よ
觸てある物皆躰
ありといち音
響此如きハハの
ある形象ぞと疑
ぬ人あらむ此音
響は形躰ハあけ
れとも躰面より
起る動空氣は觸
れて音響をあす
かぎりハ躰あり
則諸色は測量す
べき重みあけれ

ハ躰はあらざと
思ふが如し亦香
も肉眼みてハ視
えざれども形躰
ありとハハハハ
からず亦火はあ
つき躰氷よさむ
き躰とてハハハ
べあらざれども
皮膚は觸るかぎ
りハ躰ありとを
るをもおもへ
一名此形躰備り
る物あること
ハありやまぐ二
名此活用するこ
とハさとりか
きことあり二名
此活用運轉する
形躰あるよハ
酒も殊ある躰あ
らぬど人ハ氣を



バ竹が蔭とあらなり言名といふ種
類ハ其物品此作用よて名とせらる
りこれよも定格あり則うごりぬ詞
よて名とすそハあふぐ物品を制作
りてあふぎとよびこらるる物品ゆゑ
よこらるるよびたつた物品ゆゑよ
たてとよびおおた物をおびとよぶ

則藪此竹野の
竹とよべバ竹
が表とあり竹
林竹籠とよん

あふひありさそ一名ハ形體此あり
さはをみて名づけ二名ハ形體の運
用よよりて名づけ言名ハ形體此目
よみえぬ作用よつきて名づけたり
ありまぐて三柱此 神聖萬物を造
化たまふ自然此理數をはあれざる
も此あり亦詞の三條此うち内言の
部類ハ人々自己此意識より出て思
慮をはあらかまらる作用あり則ゆく
こぐらつらあをのむ此類あり此
内言ハ眞洲鏡の面よて横此五音よ

騒かーむら食と
ハ騒く意ハ食
此意あり
竹ハ殊ある生育
カありて一尺二
尺と物のたけを
測るごとくまた
かくのびはびこ
るものあり手火
のたぐひハ活用
まらこハきと
りつぞ
二名の格ハ則左
ニ圖するガ如し
かがだたらなはさざ
ごごごころのちそぞ
くぐづつるぬふすず
けげでてれねへせぜ
まぎぢちりにひしじ

活轉らくあり其第一此音みてハ助
行^ゆ ^か ^か ^む
く^こ ^け ^け ^現
去^き ^去 ^去 ^去

飲^の ^む ^む ^む
み^め ^み ^去 ^去

食^く ^は ^は ^む
ひ^へ ^去 ^去 ^去

辭を添て未言とあり第二の音みて
ハ意ニ思ふれとみて語とあらず第
三此音みて現言とあり第四此音
て令言となり第五の音みて去言と
なるあり此理を示さむよ今盤上
ニ漆り油りを滴すを視るよ其音た

ばははやわあ蔭
ぼぼもよをお蔭
ふぶむゆう
べべめえええ表
びびみいのみ表
これみてあるべし
言名此格ハ則左
此圖此ごとく
扇^が ^流 ^る ^恋 ^ふ
あふ^ぐ ^あ ^が ^れ ^こ ^ひ
名^ぎ ^名 ^名 ^名 ^名 ^名

の内類 二言 同
近世本居氏詞此
活を探索して詞
此ハ街といふ書
を著せりげよこ
れこそ初學此よ
き助けありけれ
されどこの言靈

らくとし其滴したるを視ればとら
くとあれりそれを盤ニぬるをみれ
むつろくとありぬるをへつろをみ
ればてれくとひのりそれをはぎと
ればちるくと散あり此をドめれた
らくみてハ未ど漆り油りをあらず
次此とらくみてを漆あらむかと思
ふれとつろくとぬるをみてはどめ
て漆あるをある其ぬり終つるハて
れくみてこれをこそげおとせバち
るくとある此五段此順ハ則内言五

此傳をあらざり
 ければ其四種五
 種より別る理を
 ばさくらざりし
 あり其四種の活
 とりふハ
 四段ハ活詞
 中二段ハ活詞
 下二段ハ活詞
 一段ハ活詞
 これありさて四
 段の活き詞とい
 ふハ則我眞州鏡
 みて内言といふ
 ものあり四段の
 活詞といへばよ
 行ハ
 中二段ハ活詞と
 といハ則我二言

とつふものよ
 過ぎ
 下二段ハ活詞と
 といハ則我言靈
 鏡ハ二言ハ一種
 あり
 受ける
 一段ハ活詞とい
 ふハ則我言靈鏡
 此二言ハ別種
 あり
 見
 活らゆゆ
 活らゆゆ
 これありお格
 をみても活轉ハ
 さまをハあるべ
 きありされど其

音ハ活らくと同理あり此五音ハ轉
 たらく 未 用めて言語の自他を
 ころく 思 用からハ支簡よして
 つろく 現 用廣博これ異因ど
 てれく 他 もよはされるらと萬
 ちろく 去 々あり此内言ハ詞ハ
 うちハ體ともいひつべきもハあり
 亦二言の部類ハ物と我とハ兩用を
 兼らる作用めて内言ハ如く横ハ五
 音ハ轉活かず第三の音と第四ハ
 音亦第三ハ音と第五ハ音ハとハ轉

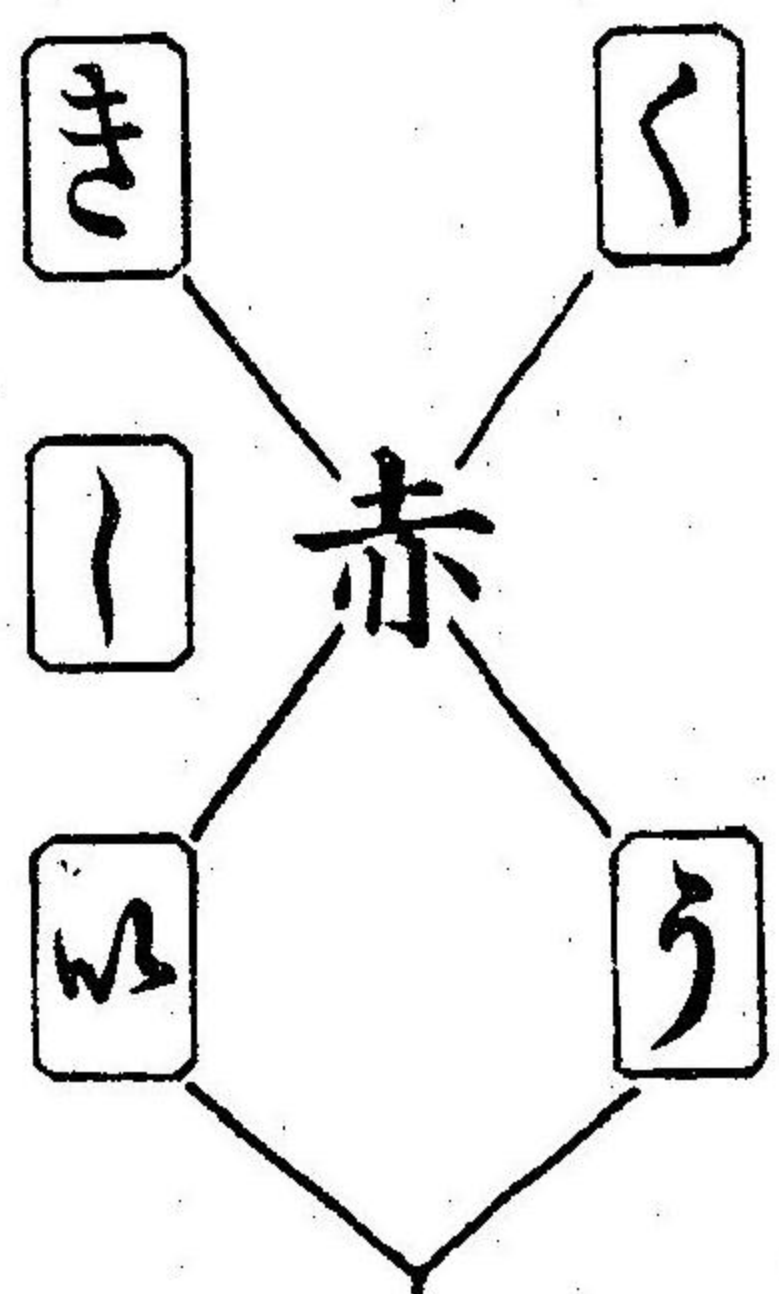
らきて天造と人為ハ作用二つあり
 かる
 人為 天造
 授ける 明ける 捨てる 燃ゆる 植るの類
 天造 人為 天造 人為
 落る 過ぎ 下り 生ひ 老の類
 天造 天造 人為 天造 天造
 此部類ハ詞ハ自他の二方ありたる
 あり則さづけハ人よさづくること
 さづかると轉らせバ人より我さづ

こと此もといは志
 りかしくあむ
 殊に近世此名哲
 たちも五十音よ
 て探索つれば正
 しきことをばえ
 きくありぬもこと
 有りあり亦本居
 氏が著せられたる
 考より書きも
 音此順を論じて
 あれどいふは
 しそいふあえ
 びと定めたりい
 たくもあひま
 ごとくありあま
 ぶひをよ
 天造人為此二方
 は分別るる二言
 は定まるのりあ
 り則

からありあけハ夜ハ自然あけゆく
 ことあかきと轉うせば我が夜をお
 きあかきことあらまぐてかくれ
 如し内言ハ五音ハ轉活きて自己ハ
 意より出るのといはるるかよ異あ
 り此二言ハ詞ハ内の用ともいひつ
 づきもれあり亦外言ハ部類ハ外よ
 りきまるとして我五識ハ觸て志る天工
 自然の作用あり則真洲鏡外の五音
 ハ轉活く詞あり

かが人為天造
 こごと天造人為
 くぐぶ天造人為
 けげで天造人為
 死たぢ人為天造

則けげで此外柱
 るて天造の初柱
 ハかがた此初柱
 ハて人為とあり
 けげで此外柱ハ
 て人為此初柱ハ
 かがた此初柱ハ
 て天造とありな
 り亦きぢちの雷
 柱ハて天造此内
 柱ハて人為とあ
 りきぢちの雷柱
 ハて人為の初柱
 ハこごと此内柱
 るて天造とあり



此二音ハ意ハ感思のみ
 まて語をあまぐるあり

耳ハ聲	あかく	ひくく	目ハ色
あかく	あまく	あまろく	くろく
鼻ハ香	くまろく	舌の味	あほく
からく	はかく	皮膚ハ觸	いらく
かゆく	さむく	あつく	意ハ感
うれく	かあく	をか	

こびくハ類あり此外言ハ詞ハう

なり二名めて表
名蔭名の活きあ
ると同じさほこ
此二言みくさく
此活きあり別よ
くハしくいふべ
しされど内言と
ハさらよ混ふべ
うらぐ
内言ハ助詞た此
初柱よむすあど
此未來の助辭を
そへて未言とあ
り二言ハけげで
此外柱亦きざち
此雷柱よむすあ
どの未來の助辭
をそへて未言と
あらなりこれよ
て明らかあらべ
一則

ち此幽冥あるもれとひつづー此
三條各三種ありて九條とならあり
亦結此三條のうち内結とハ詞れう
ちよて助辭をからぞして自他を分
別つあり則ゆのぞとひひきれば未
し行ぬことゆくといひきれば現よ
行ことゆけといひきれば人を行
ることゆきといひきればまぐよ行
たることゝ其詞れうちよて自他三
世此別定はるあり此内結ハ結れう
ちの體ともいひつづきまれあり中

行こ
内言
落
外言ハ内言二言
よ混ふべきこと
さうよあし此詞
此三條も例れ三
條此作用の理お
り此ことかへす
く考ひあはまべ
しあれ言靈の要
領あれバあり
声色香味をさし
ていハバ名あり
我意識よ觸ち作
用ハ外言あり混

結此部類ハ名と名又詞と名亦詞と
詞の間亦初め亦終よありて言語此
自他を辨別つべき助辭あり則ひさ
はからひでいぎ又ゆ急さくふに
まら又けとめりらむべしはたぐ
ひありこれ結れうちの作用ともひ
ひつづきまれあを外結此部類ハ言
語の外よありて自他を辨別つ所謂
てにははといふものあり則ハもよを
になへとやか又發語といふもれ
ひさみをれたぐひ尾辭といふもれ

水ぞあがらるる
 水こそあがらるる
 これらよてあは
 らへしるべし合
 鏡よくハハハ
 顯定幽此三つも
 例の三作用此理
 の外あらはずよ
 味ふべし
 さて顯名よて山
 をやまと名づけ
 るる理川をかえ
 と名づけしる理
 も一つくあきら
 うよささくつべ
 し次此眞州鏡の
 みまはつてへ
 よときあらすべ
 此名と詞と結此
 三つに分るること

品あり定名ハ時よよ所よよりて
 定まる物此名あは則東西の如き東
 家此西ハ西家此東よて定形あきも
 此あり幽名此種類ハ物あれも手
 よとりて視べからざれも此あを音
 よ。たかひく。何れども耳あけれハ聞
 べからば色よ。何かあを。何れども目
 なけれハ視べからざれら此如き
 此れありさて顯名ハ名此うち此形
 體定名ハ名此うちの作用幽名ハ名
 此うちの無形ともひひつべきも此

ハ我 皇國ハ限
 らせ世界一般同
 一ありまが支那
 國此ハ
 名詞名結
 人食飯矣
 名詞名結
 人將食飯
 此三條詞の三條結
 此三條と九條よ
 ハ分別せ給ど自
 らこれをもつて
 ばつてつべきあ
 り其理あしとい
 ふことあきも此
 あり結此三條ハ
 明くも別ちみべ
 きよてもあつべ
 し則
 關々ハ切宛。參差。
 此類。亦沛然。油然。
 班如。爾。焉。此

ありさて二名此三條ハこれも顯名
 定名幽名と名づくその上圖此如し
 さて顯名此種
 類自然形體此
 あれる物品あ
 り定名の種類
 ハ人此制作し
 るる物品あり幽名ハ風雨此如く現
 きうとけハ視べく識るべく幽きひ
 そまれバ視べからざ識りがさき物
 品あり此三種此うち顯名ハ二名の

名	二名顯
名幽	名定
風雨天火	舟金酒
	稻種目手爪竹

類亦焉。乎也哉。の類。これ三。此助辭あり。西洋諸州。此もこれよあむらへてあるべきあり。顯名ハ一名。此うちよも現よ見べきものあれ。混ふ。こ。と。あ。一。定名ハ必相對するも。此あり。則前といへ。バ。後。と。り。ひ。左。とい。へ。バ。右。と。い。ひ。畫。と。り。ひ。バ。夜。とい。ひ。た。ぢ。ひ。あ。り。こ。の。形。體。ハ。あ。き。む。れ。と。思。ひ。る。れ。と。万。物。形。躰。上。よ。つ。き。て。定。む。る。よ。て。や。が。て。名。あ。る。を。あ。ら。べ。幽。

名ハこれといさ。空氣ハ顫動をさ。陽ハ光線物躰上。鼻ハ感るを香と。辨知もべき精神。腕の作用物躰を。力とつひれ類ひ。此三條を一名。二名の三條も此。

うちよて形體備り定名ハ作用よひ。とく幽名ハ幽冥ある物品を以ひ。つづきもれあを此三つよ別る。理もか。此造化ハ理數よもつづくも。此あり亦言名ハ三條も顯名定名幽名と名づく則圖ハ如く顯名ハ天造。此作用を名よ。よべる物品あ。り則水霞霧あ。ど皆自然此作。用よて現よ其。

名	言
名幽	名顯
思戀悅哀	水霞烟霧
	楯簾扇池硯

形體ある物品あり定名ハ人ハ制作て出せる物ハ用をもて名付たる。則あふぐ物を作てあふぎと名づけたる。物品を制作てたて。と名づけ魚をいくろ沼を掘て。以け。と名づけたる。あふぐひこれあり幽名ハ現よみえぬ作用よて名づけたるも。此則我思を。我戀ハ。あど。り。ん。を。其。思。戀。ハ。名とありて詞よあらず亦木をひく。も。れ。を。あ。ひ。き。と。名。づ。け。酒。を。れ。む。人。を。さ。け。れ。み。と。よ。ぶ。も。同。じ。こ。と。あ。り。

理よひとし則顯名ハ表名陰名此二轉あるも此の内自然形骸此そあハリさるも此稻目手爪あどよて人の制作したるも此よあらざるをいふあり定名ハ人此制作しる物骸あり則運行さる物を造りて船と一用材よまべきも此を制煉して金と一酔べき水液を製して酒と一を類あり幽名ハ現れさる時ハ見べく識べく隠るれば見べからば識べからざる形骸

あり則吹ときハ風あり静まれば氣さふるときハ雨の地上よてハ水之燃るときハ火之消るときハ見べからばこれらのたがひあり言名此三條も亦これよひとし顯名ハ天造自然此作用よて名づけさるも此あり定名ハ人此制作しるも此よて其あさぎ又ハ用をもて名づけさるも此あり則あふぐべきも此を造りて扇と名づけ墨をさるべきものを造りて硯と

此顯名ハ言名此うちよも形體ある物定名ハ作里定めたる物幽名ハ幽冥よてかくれさる物といひつべし亦詞此三條も各三種あること名此

言	内
言幽	言顯
霞氷烟曇	行打去言飲食
	貸足成漬渡

てら行さ行此二行よ活轉く詞あり則左此如く

如し顯言ハ人々自己此思慮より出て作用をあす詞あり定言ハ一詞よ

た りれ ら
た すそ さ
りれ ら
りれ ら
た すそ さ
りれ ら
か ら
か すそ さ

幽言ハ天造自然ある作用此詞ありかまむ。けふる。こある。あとなり此三種も顯言ハあらハある詞定言ハうつら詞幽言ハ幽冥ある詞ともいひ

言	二
言幽	言顯
明燃消覺生	受戀侘用越
	授捨漆植

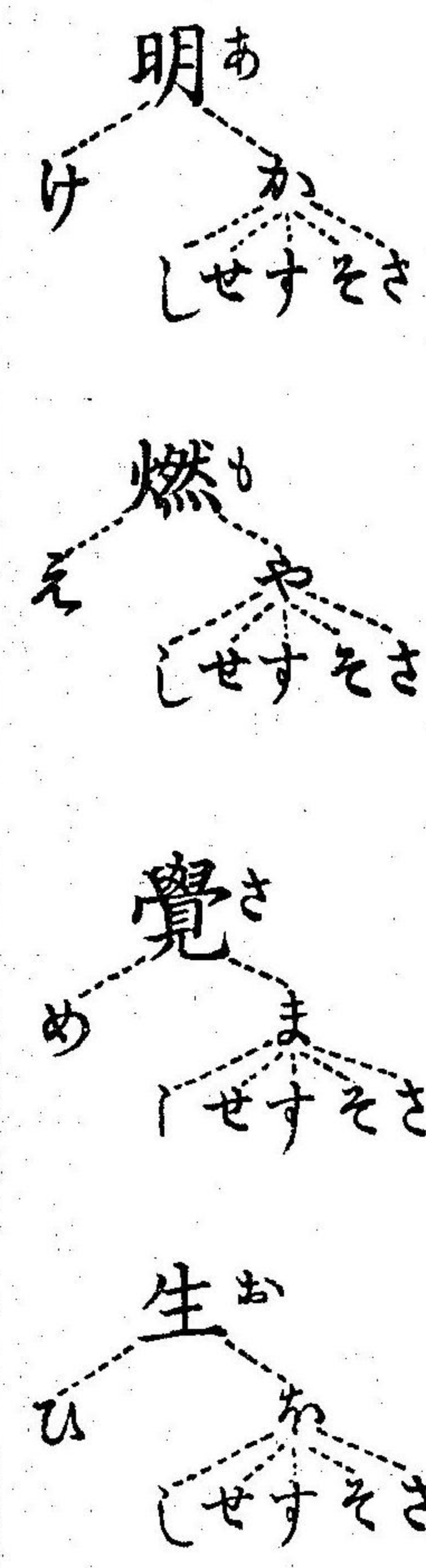
つべし二言此三種これも顯言定言幽言なりそ此顯言此

名づけおふべき
此を造りて帯
と名づけたるた
ぐひあり幽名ハ
目みみえぬ志
ぎを以て名づけ
るる物品あり此
一種ハ初まあび
れともがらよハ
さとりえかとき
ことあり則哥此
うちよて
木かくれてさつ
きまつともわと
ぎんはゆあら
ハよ枝うつり
せらこのは糸あ
らハハ詞まハ
非ず羽を習つす
躰言あり亦
あつなれバヤど
よふまぶる蚊や

り火れつらまで
我身志たもえを
せむ此志もえ
も詞まハ非ず一
つ此名あり則我
戀をとつハ我
山をとつハも同
一般あり我思哉
といハバ我宿か
あといよと同一
般あるもあずら
へて志るべしこ
れを言名の三條
といふあり
内言ハ三條ある
も名ハ理とあ
同ハことあり顯
言ハ人を自己ハ
思慮より出たる
作業あり此類ハ
さとりやす定
言ハ我思慮ハ内

類ハ物をまら二言よて。うけをへ。
らひ。此類あるを定言ハ人為より天造
此内言ら行よ轉らくあり

幽言ハ天造よ人爲此内言さ行よ
活らくあり



顯言ハら行よもさ行よも活用よ
此三種れら顯言ハあらハある詞
定言ハひひさだめ幽言ハ自らなる
詞といひつべきも此あり此二言ハ
すべてらさぐれ轉活ありてらひは
あびれ人のささるがきこと多し

外言顯	赤青黒臭
定言	寒暖痛痒
幽言	悲哂嬉樂

外言ハ三種も
顯言定言幽言
あを顯言此類
ハ外よ我五
識よ觸て志る

言よてさ行よ活
らき他の自然此
内言よて引行よ
活らく物心幽言
ハ兩間自然此作
用よて人為此関
らざるも此あり
虚空此かすむく
もるたるあど此
たぐひあり二言
此顯言ハ人をま
ち物をほつ二言
ありすべて二言
ハ自己の思慮よ
出る此みよハあ
らむ必他をかぬ
るものありさて
顯言ハ天造自然
ハ關係らず定言
ハ人をほつ人為
此作業より天造
自然此内言引行

ものうち面部此神よふるも此
のみあり則聲此たかくひく。色此
あかくあをく。此類あり定言ハ皮膚
よ觸るも此よて則あつく。さむく。此
類あを幽言ハ精神よ觸れて志るも
の則うれしく。かあしく。をかしく。此
類あり此うち顯言ハ定形ある如く
定言ハ人よよをてさざる幽言ハ
外より視志あがさきも此とひひつ
べしよて詞の品九種あり結よも
三種づゝ合せて九種あり則内結此

よ活らくあり幽
言ハ天造自然此
二言より人為の
作業さ行此内言
よ活らくあり
此もさるたさほ
も定格則あり
かかだた 則二名
こごどと 此活き
くぐづつ とあま
けげでて トさま
まぎぢち あり
外より我五神よ
觸る物耳此音ハ
空氣此類動耳此
鼓膜よふる強
弱あり眼此色ハ
大陽此光線視神
よふる強弱あ
り鼻此香ハ揮發
此極微鼻神よ觸

結		内	
結幽	結定	結顯	結顯
行ゆ けり	行ゆ か	行ゆ き	行ゆ け
りれろ	すせ ゆる	あ かす	あ かす
浅さ きし	明 せす	植 る	植 る
寒 けし	寒 み	寒 さ	寒 さ

三種顯結定結幽結とひみ此内結ハ
内言二言外言ともよ三種よよか
あり則内言よも二言よも外言よも
各顯結定結幽結あり此三條ともよ
混ひやすしよく考へみよささて内言
よて行く行け行きと其まよ結ぶ

ハ内言此顯
結あり行か
の行よりえ
ゆるせす
と自他二此

る強弱あり味ハ
食物ハ揮發質味
神ハ觸る強弱ハ
り寒暖ハ温の膚
ハふる度分ハ
り痛痒ハ皮膚ハ
物質ハ抗拒する
發揮あり悲嬉晒
樂ハ神魂ハふる
る感抗あり此詳
現ハ別ハ蒼生論
あり
内言ハ内結れう
ち顯結よて
か...此行ハすあど
行ハ現を添て未言
け今とある
き去
定結よてハ
行ハえ所行と書
せ令行と書

二言とあるハ定結あり行け此行よ
りら行ハ活らくハ幽結あり亦二言
よて受け受くと其まゝハ結ぶハ顯
むすびあり明ハ此行よりさ行ハ活
らくあり授ハ此行よりら行ハ活
ありこれを定結といふあり淺せ淺
きるといふ二言より淺さく淺さ
と外言ハ變るハ幽結といふあり亦
外言よて其はゝ結ぶハ顯結あり
寒さ寒みと活らくハ定結あり寒む
けく寒むけきと一轉するハ幽結あ

此えゆるハ中こ
ろより轉訛して
れるといふあ
り幽結
行ける 業集ハ
り行有と書
二言よて顯結よ
てハ
けくハ未言
受けよ現言
けよ令言
去言
定結よてハ則定
言幽言ハ二種ハ
結びあり幽結よ
てハ二言より外
言を生ずるあり
則
淺する あさし

り此三つハ理前ハ如シ中結よも三
種あり則顯結ハいさほつかられた
ぐひあり定結ハゆるさくたにた
ぐひあり幽結ハけりめりらむのた
ぐひあり此種
のうちいさい
ざあハ顯結
ハ結れうちの
形體ともいひ
つづきもれあり定結ハ作用といひ
つづきものあり幽結ハ精神ともい

結	中
結幽	結定
けりめりらむ	ゆるさくすら

深ける ふろし

明ける あかし

暮る くらし

あどめたぐひの
二言をべて外は

活くよハあらざ
外言ハ顯結よて

寒く 此此
ニツハ雅言ハハ

ハ中ころより用
ひより

定結よてハ
寒み これも定格

寒さ あり

夜をさむみ

夜のさむさ
これありこれを

をみけきといふ
幽結よてハ一轉

けく けきけし
と活らくあり則

さむくとさむ
けくとハや其

意別ありと一
づ

先哲うち言語ハ
あらんをわづ

論トされども中
結外結ハ二部ハ

ことハ大よそよ
も定論ハありさ

るからハ古書ど
もをとくよも往

々あやまれるこ
と多きありたぐ

一マより助詞發
語あどのひて見

すぐを故あり漢

三ノ巻 二ノ巻

ひつべきものあり此三種くハ一
類例をとりて示さべ一亦外結ハ三
種ハ則顯結ハさを一のさだりあど
のさををうせをうくハ山あどけを
あり定結ハをあハやまハあどハ
山をみつをあどのをあり幽結ハゆ
くかもかあ
もあどのもよ
ろ一あ何らむ
あゆかああど
のあなり此三

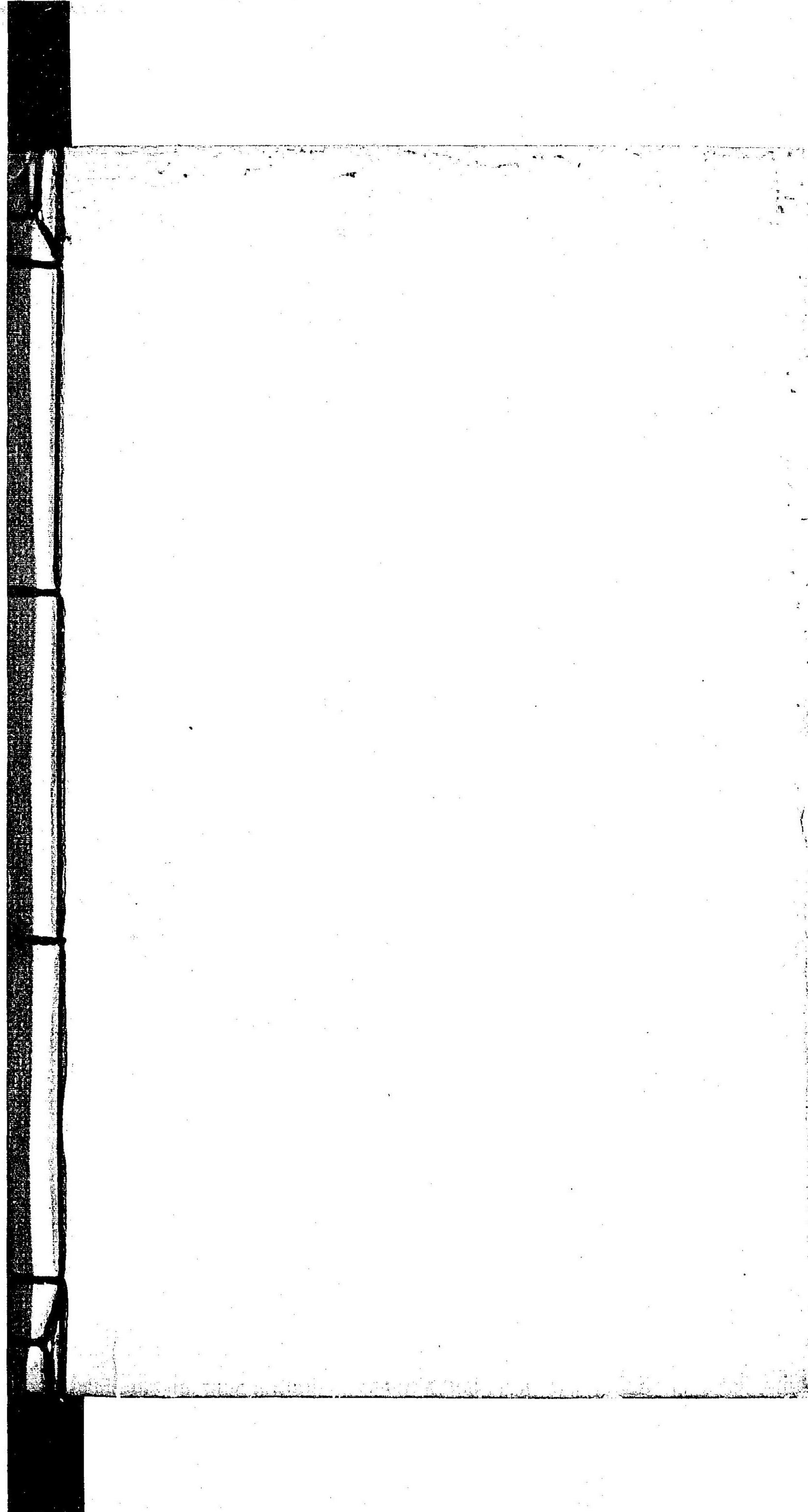
結	外
結幽	結定
も。あ。そ。を。ね。	ハ。て。に。を。や。
	さ。は。み。ひ。を。

種も類例をひきてくハ一示すべ
一則萬葉集をばドめ記紀どもハ古
詩をひき出て其用さほを示すあり
其くろをね一て其ことよりをよ
くくさとマつべきあり

三ノ巻 二ノ巻

國此文をみるも亦志かりこ此助辞此たぐひを詳らみすれば彼文章もたやすくかき得べきも此あり蘭土此も同トことあり

眞洲美乃鏡 上の巻 終



真洲美乃鏡
鍋島誠著
上

810.1
N114m
W

076976-001-8

810.1-N114m

真洲美の鏡

鍋島 誠/著

上

M19.12

DAC-0149

